

## 幼小中大連携による美術教育の試みについて（Ⅱ）

中川 泰（長崎大学教育学部）

宮崎友理子（長崎県美術館）

### I. はじめに

本研究は、教員養成大学を起点とした幼小中大連携によって、参加する幼稚園・保育所や小学校や中学校の子どもに対して、普段の教育活動をより豊かにする活動、普段の教育活動にはない意味ある活動を、美術教育の領域で提供する方策を探るものである。さらに、それらの活動を通じて、将来の教育現場を担うことになる大学生を育てるものである。

長崎大学と長崎県美術館との博学連携は11年目に入った。1年間に数回の“共同ワークショップ”を実施してきている。その中には幼小中大連携の視点での事例も既に数多く存在している。将来、博学連携を絡めた幼小中大連携へ昇華させたい。本稿の目的は、2016年12月に実施した長崎大学と長崎県美術館の“共同ワークショップ”の成果を整理し、長崎大学と長崎県美術館との博学連携による魅力的な活動を継続させることにある。

### Ⅱ. 共同ワークショップ（2016年12月）

○日 時：2016年12月24日（土）・25日（日）10:30～16:00

※当日随時受付（15:00最終受付） ※所用時間（30～60分）

○場 所：長崎県美術館 2F アトリエ

○受講者：181人〔12/24(土)：100人、12/25(日)：81人〕

※プレワークショップは2016年11月20日(日)にアミュプラザ4Fで実施されたが、活動内容はハートのオーナメントである「ユーレヤター」のみ（受講者：93人 ※普段、美術館のワークショップに来たことがない層にアプローチできたことは大きな収穫）





「ニッセ」と呼ばれる小さな妖精のオーナメント

活動名	「デンマークのクリスマス飾りを作ろう」
活動内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>○デンマークのクリスマスや暮らしに想いを馳せながら、クリスマスの飾りをみんなで手作りして楽しむ習慣に挑戦し、その楽しさを味わう（開放型ワークショップ）</li> <li>○デンマークで最もポピュラーなクリスマス飾り「ユレーヤター」をつくる</li> <li>○「ニッセ」と呼ばれる小さな妖精のオーナメントをつくる</li> </ul>
対象	5歳～大人（小学生以下は保護者同伴）
時間	制作時間 30～60分
材料・用具	<p>材料費 100円（ハート・ニッセ各1個ずつ）</p> <p>〔材料〕折り紙、フェルト、布、リボン、毛糸、雪モチーフ、目玉ムービング等</p> <p>〔用具〕木工用ボンド、のり、はさみ、カッター等</p>
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>○国民の幸福度の高いデンマークの暮らしやクリスマスの文化を知る</li> <li>○身近な素材を用いて、自分で工夫してクリスマスを楽しんで演出する</li> <li>○いろいろな質感の素材に触れる</li> <li>○家族や友人どうしで、作る喜びを味わう</li> </ul>

広がり	○普段の暮らしの中で、身近な素材を使って自ら工夫して作るようになる
ポイント	○企画展「デンマーク・デザイン」(於 長崎県美術館 2F 企画展示室) のオープニングと連動する ○教育普及・生涯学習事業「クリスマスワークショップ」を博学連携事業として位置づける ○メインターゲットとして親子連れの家族を想定する ○美術館主導・大学支援型のアクティビティとする
企画者	宮崎友理子〔長崎県美術館教育普及〕
指導者	宮崎友理子〔長崎県美術館教育普及〕 長崎大学博学連携学生・院生 22 人〔教育学部美術科 1～3 年 17 人、4 年 4 人 (※蓄積型体験学習として参加)、大学院教育学研究科 1 年 1 人〕
評価	○設けられた制限の中で、色や素材、質感の組み合わせを工夫しているか ○妖精「ニッセ」作りでは、限られた情報からいかにイメージを膨らませて、オリジナルデザインに落とし込んでいるか

デンマークのクリスマスから着想したオーナメントを作ることにしたものの、本場デンマークの「ユールヤーター」については、未就学児や小学生には若干難しそうであったため、簡単な作り方に変更することにした。「ニッセ」については、アトリエにある豊富な材料を用意し、自由に組み合わせて使ってもらえるようにした。

教育普及・生涯学習事業「クリスマスワークショップ」を博学連携事業として位置づけたのは、2015年に引き続き2回目である。2016年12月の長崎大学との打ち合わせなど協同活動については以下のようにまとめることができる。

月 日	時 間	内 容	1～3 年 M1	4 年：蓄積 型体験学習
12 / 5 (月)	8 : 00 ～10 : 00	説明会・試作	17 人	—
12 / 15 (木)	13 : 00 ～16 : 30	館内ミニツアー・ワークショップのオペレーション 確認・装飾づくり	5 人	4 人

12/23 (金)	9:30 ~12:00	「デンマーク・デザイン」 展の鑑賞・会場セッティ ング・直前の準備と役割分 担・オペレーションの確認	13人	—
12/24 (土)	9:30 ~17:00	ワークショップ1日目	16人	4人
12/25 (金)	9:30 ~18:00	ワークショップ2日目	16人	4人

博学連携における長崎大学の指導者は、教育学部の美術科教育研究室を中心に、学部1年6人、2年7人、3年4人、4年4人（※4年のみ蓄積型体験学習として参加）の学生、大学院1年1人、総計22人である。

ワークショップの大枠と方向性は宮崎友理子がコントロールしているが、会場の装飾・設営、オペレーションなどは学生・院生の自主性を尊重しながら話し合うスタイルで進行させている。また、ワークショップの1日目と2日目の担当コーナーを入れ替え、ワークショップ全体の業務・多様な経験をできるように配慮している。

なお、最初の説明会において、「美術館でイベントやワークショップを企画するときの流れ」について、以下の説明があった。

①ターゲットの想定、内容の考案

◎展覧会との関係性、美術館としてアプローチしたいこと、伝えたいこと、集客のことなどを踏まえて“リサーチ”（WEB…Pinterest、本、雑誌、他館の事例、過去にストックしておいたネタ）

◎試作…安全性、対象年齢に応じた適切なレベルへの落とし込み、講師への依頼など

②時期、時間、場所、価格設定、予算などの決定

③プレゼンテーション

④告知・PR

⑤オペレーションの確認・人員確保・材料調達など細々したことの準備

⑥会場設営

⑦イベント本番

⑧片づけ

⑨報告書の作成

### Ⅲ. 博学連携学生・院生の記録

ワークショップに参加した学生と院生の気づきは、反省会で検討され、次のようにまとめられた〔○はプラスの感想、△はマイナスの感想、▲は困ったこと（⇒は対策）〕。

□ワークショップ1日目を終えて

<受付・誘導・イントロダクション係より>

- 和やかな雰囲気であった
- 集客時、声かけしたところ参加してもらえて嬉しかった
- ニッセに関して頑張って説明した（もう少し詳しく説明できればよかった）
- ワクワクした顔で来場、帰りも満足して帰ってもらえた
- ハートのユーレヤーターを作る楽しさが伝わっていた
- サンプルを作っていたところ、参考にしてもらった（アイデアの共有）
- 目を青く塗ったりする工夫が見られた
- ニッセの説明が一定程度できた
- 子どもが集中して制作していた（他のイベントでは飽きて遊ぶ子どもが多かったが今回は違った）
- ▲混雑する時、説明に時間がかかってしまい不安
  - ⇒ 制作サポートチームと連携する
- ▲アンケートを渡すタイミングが難しかった
  - ⇒ 答えてくれそうな人に受付時に渡す
- ▲中国や韓国など外国からの受講者への対応に戸惑った
  - ⇒ 英語が話せるスタッフに助けを求める

<制作サポートチームより>

- ユーレヤーターの難しいバージョンを、10歳の子どものでもチャレンジして作っていた
- 子どもの頭が柔らかい！？
- 大人よりも、子どもの方が集中して制作していた
- 混雑していなかった分、受講者はゆっくり満足いくまで制作を楽しんでいた
- 男の人も熱中して作っていた
- ユーレヤーターの難しいバージョンも、失敗しながらも制作…楽しそうであった
- 英語での対応、とても満足してもらえた
- 独創的なニッセがたくさん完成していた
- 材料が豊富なのがよかった
- △同伴者が暇そうにしていた（話し相手になったらよいかもしい）
- △ユーレヤーターを作る時には仲良くなれるが、ニッセ制作時には受講者が集

中するので、距離を感じた（ちょっと寂しい）

- ▲袋をどのタイミングで渡していいか迷う
  - ⇒ 制作の終盤に袋を渡す
- ▲制作している時、声かけのタイミングが難しかった
- ▲左利き用のハサミがあればよかった
  - ⇒ 今年度中に購入要検討
- ▲制作時、机の角のクッションを触って遊び、角で頭を打つ場面があった
  - ⇒ 注意が必要
- ▲雪の結晶を作っていたが、途中で中止に
  - ⇒ オプションでの対応だったことを宮崎が周知していなかった
- ▲ニッセに関する説明をもっとすべきであった
- ▲ユーレヤーターの取手部分、糸でも OK と言ってもよいかもしれない
  - ⇒ OK
- ▲壁にサンプルをはってあげたらよいかもしれない
  - ⇒ 可能な範囲で作って設置する

☆2 日目に心がけること

- ◎挨拶をする
- ◎受付・イントロダクションチーム・制作サポートチームの連携

□ワークショップ 2 日目を終えて

< 受付・誘導・イントロダクション係より >

- 1 日目の反省を踏まえて、サンプルを作って説明したところスムーズに進行した
- 壁にニッセのサンプルを設置したのはよかった
- ピンセットを用意したところ、年配の方によく利用してもらえた
- 図工が得意な子どもの参加者…対応する中ですごく勉強になった
- 4 時に終了してからの参加希望者が多かった（もう少し長くあいていたら…）
- 集客の場面では、手ごたえがあったり手ごたえがなかったり…人が来やすい声かけの工夫をした
- 1 日目よりも、2 日目の方がスタッフ間の連携がスムーズだった
- ▲受講者に配布する袋に、あらかじめチラシなどを入れて渡したが、さらに、チーム内での共有をするべきだった。
- ▲小さい子どもだけ、廊下に出て遊ぶという場面があった
- ▲アンケートを先に渡したが、もしかすると後半に渡した方がよかったかもしれない
- ▲制作物ごとにアンケートを渡すタイミングを考慮した方がよいかもしれない

▲ニッセの説明が、やはり難しかった。解説を壁に掲示できればよかったかもしれない

<制作サポートチームより>

- 制作している受講者に、着色した羽など魅力的な素材を提案してみた
- 持ち帰り用の袋にも絵を描いて楽しそうな家族がいた
- アドバイスをし過ぎず、ある程度自由に作ってもらうのがよいのではないかと感じた
- ▲受講者への対応中、休憩に入るタイミングが難しかった
- ▲受講者をどこまでサポートしてよいのか分からなかった
- ▲受講者に対して、学生の人数が多かった

☆スタッフより

- ◎1日目に比べてずいぶんと連携できていた
- ◎安心して任せることができた（また率先して活動してくれる姿が見られた）

ワークショップが終了した後日、参加した大学生と院生はワークショップレポートを作成し、長崎県美術館へ提供した。ワークショップレポートに対するフィードバック（宮崎友理子の感想）は以下の通りである。

<よかった点>

- ◎手持ちのサンプルを使って、受講者に説明するなど工夫が見られた
- ◎材料を工夫してクリエイティブな提案を受講者にしていた（白い羽の着色など）
- ◎ボランティアスタッフが受講者と関わる様子、会話から様々な気づきを得ていた
- ◎持ち帰り用のビニールやアンケートをとるタイミングなど、受講者の立場で考えて行動に移していた
- ◎ワークショップが運営し易いよう、環境整備や掃除などを気づいた時にできていた（制作環境を良好に保つことができた）
- ◎それぞれ自分の得意分野を活かしながら活動していた
- ◎率先して、呼び込み、他のチームのサポートなど動く様子が見られた
- ◎将来を見据えて、今回のことを今後を活かそうという気持ちを感じられた
- ※「よかった点をあげるとキリがない。改善して欲しい点などもあったが、わざわざ指摘するまでもなく自ら気づいて改善している姿が頼もしかった」

<受講者とのコミュニケーションについて>

全体的に受講者とのコミュニケーションについて、どのくらいの距離を保って



どこまで関わっていいのかを戸惑う感想が見られた。

コミュニケーションについて、あるレポートに「受講者も私と同じ人間で、制作が好きで面白い作品にしようとかかわりを持っている同じ感覚の人ばかりだと思えば気が楽になりました」という言葉があり、印象に残った。私も年配の人にも、逆に言うと2歳や3歳の子どもにも、できるだけ「同じ人間」として、接するように心がけている。

アートの分野では、あらゆる感覚・考え方・表現のあり方が受け入れられるという、大らかな雰囲気と土壌がある。いろいろな人とフラットな関係性が築きやすいという特長がある。そういうことを意識して人と関わっていくと、もう少しリラックスした雰囲気でコミュニケーションがとれるようになる。

#### <美術館の改善点>

- ◎ニッセに関する情報や資料をもう少し丁寧に紹介すべきだった(掲示物など)
- ◎海外の受講者への対応を想定していなかった
- ◎左利き用のはさみなど、道具の準備や配慮
- ◎スタッフ間のコミュニケーションを、よりよく取れるようにする工夫(昨年のように、事前準備でお互いを自己紹介したり、一緒に鑑賞したりする時間をもっと取るべきだった)
- ◎机の角のクッションや安全面への配慮
- ※「いつも同じスタッフでワークショップなどを企画・準備しているためか、自分たちのワークショップをあまり客観視できなくなっていた。さらに、“このくらいでいいか”という甘えがあったことを痛感した。よりよい美術館やワークショップのあり方を、今一度考えてみよう、思いを新たにすきっかけとなった」

#### <所感>

博学連携事業であり、一方的に指示してコントロールするのではなく、学生に委ねる「余白」のようなものを残した状態で本番に臨んだ。

それがよかったのか、そうでないのか…実は私自身まだ答えが出ていない。もしかすると、もっと「こうしてください」と具体的な指示をした方がよかった部分もあるかもしれない。

学生にもいろいろな考え方の人が出て、また美術館スタッフ・ボランティアスタッフにもいろいろな考え方の人がいる。受講者も一人一人違っている。そういう人たちが集まって成り立つ「ワークショップ」は「生き物」のようなものだと思っている。どういうコミュニケーションが生まれて、どういう化学反応が起きて、どういうクリエイティビティが発揮されるのか…私自身、毎回、未知のところまで勝負しているところがある。

ただ、今回、受講者のアンケート結果を見ると100%の満足度である。学生の

雰囲気や、サポートなしに、この満足度は得られなかったと考えている。

#### IV. まとめ

「クリスマスのアトリエ」は前回と前々回、クリスマスの約1週間前に実施してきたが、今回、「デンマーク・デザイン」展のオープニングに絡めて、クリスマスの24日・25日に開催した。多くの受講者を期待していたものの、前回の441人、前々回の266人を下回り、181人という結果になった。その理由は、イベントが多い時期であること、ファミリー層が外に出歩かないクリスマスに実施を強行したことにある。ある美術館スタッフから「原因は広報不足」との反省の弁も出たが、今回は企画展の絡みによる時期の決定であり、仕方ないことである。

翻って学生・院生はこれまでにない学びのチャンスを得ている。大学にとっては学びの可能性として今回のような規模のワークショップも魅力的である。企画は秀逸なものであり、受講者にとって満足度が非常に高いものである。時には受講者の人数を最優先しないスタイルが大切な価値になる。将来的には美術館を訪れる人を大幅に増やすことにつながるかも知れない。

博学連携事業として、2015年12月の「クリスマスワークショップ」や2016年5月の「ゴールデンウィークイベント」に参加した学生・院生が、2016年12月の「クリスマスワークショップ」でも活躍している。受講者数に対して、学生・院生スタッフ数が多かったが、これまでの人数が多く大混雑していたワークショップと比較して、混雑することなく、比較的ゆったりと穏やかな雰囲気もあり、一人一人の受講者としてしっかりコミュニケーションを取ったり、学びの多い中身の濃い時間を過ごしたりしている。また、美術や英語といった得意分野を活かしながら丁寧に受講者と関わったこともあり、アンケートに「学生スタッフの方々が親切に教えてくださって楽しく作品を作ることができました」とか「皆様親切に指導してくださったので不器用者でも作ることができました」といったコメントが数多く見られる。そういった経験に加えて、長崎県美術館のスタッフやボランティアの方の励ましの言葉が多くの学生や院生を勇気づけている。

今回の「クリスマスワークショップ」の成果をポスターにまとめ、幼小中大連携のツールとする計画が進行している。これまでの長崎大学と長崎県美術館との博学連携の成果も徐々に取り入れながら、将来、博学連携を絡めた幼小中大連携へ昇華させたい。

長崎大学と長崎県美術館との博学連携による魅力的な活動を継続させ、さらに幼小中大連携の視点を加味することで、博学連携のイベントを経験した学生・院生が、将来、教員として美術館を活用した優れた教育方法を創造し、多くの子どもたちに美術の楽しさを伝えてくれることを期待している。